

今さら聞けない！？ ～ 独居～

独居とは、ひとりきりで暮らすこと、つまりひとりずまいのことです。近年、急速に進む少子高齢化社会の中、独居している老人の割合が急激に増えてきています。この少子高齢化が加速する中、独居老人の数もますます増えてくるのは間違いのないと言われています。今回は独居について、学んでいきましょう。

●独居するというのは悪いことなのか？

突然ですが皆さん、独居老人についてどういうイメージをお持ちですか？独居老人とは読んで字のごとく独り暮らししている高齢者のこと。一般的に独居老人と聞いて良いイメージを思い浮かべる人は少なく、大半の方がマイナスのイメージを浮かべるのが現状です。今後、ますます独居老人が増えるに伴い様々な問題も浮上すると考えられます。だからといって、独り暮らしを希望する老人を否定してもいいのでしょうか？答えはNOだと思います。

●独居老人が必ずしも悪いわけではない。

独居老人が全てマイナス要因かと言えばそうではありません。住み慣れた土地で親しい友人に囲まれ、いきいきと暮らしている独居老人もたくさんいます。確かに、老人が独り暮らしをするというのは何かあった時の事などを考えると不安になります。だからといって、子供が自分の住んでいる場所に親を呼び寄せて一緒に暮らす。いわゆる「呼び寄せ老人」にするのが一番良い方法なのでしょうか？

近年、言われている説のひとつに、阪神大震災後、孤独死を生み出した原因のひとつは、地域コミュニティの崩壊だと言われています。

呼び寄せ老人も一種のコミュニティの崩壊（喪失）にあたるといえます。若い人であっても長年住み慣れた土地から



離れる際、少なからず喪失体験を味わうことと思います。いわんや、これが高齢者の場合、引越しに伴う喪失体験も大きく、また新しい環境への適応能力も低いため大きな苦痛となることもあります。人によってはうつ状態や孤独な状況に陥ったりします。

●福祉先進国スウェーデンの場合

福祉先進国と呼ばれているスウェーデンには「呼び寄せ老人」に該当する言葉はないようで、この国ではどんな過疎地でもホームヘルパーが活躍しており、年老いても一人暮らしができる環境が整っているそうです。

スウェーデンでは、1960年代に高齢化社会に突入して以来、市民に身近な市町村のような自治体が財源と権限を持った、身近なところからの高齢者福祉の充実に努めています。その結果が上で述べたような、「過疎地のお年寄りでも一人暮らしができる」という事実に見えています。

一方、日本の場合はどうでしょう。

「呼び寄せ」という家族の自助努力だけで、過疎地の高齢化問題全てを解決することが出来る

のでしょうか。

過疎地域で安心して一人暮らしができる

というようなことが、日本

全体で見受けら

れる状況には未だに至って

いません。ですから、

スウェーデンのように、

身近な市町村といった

自治体がいかに福祉の主体

になれるかが今、問われているように思います。



↑ヘルパーの充実を！

